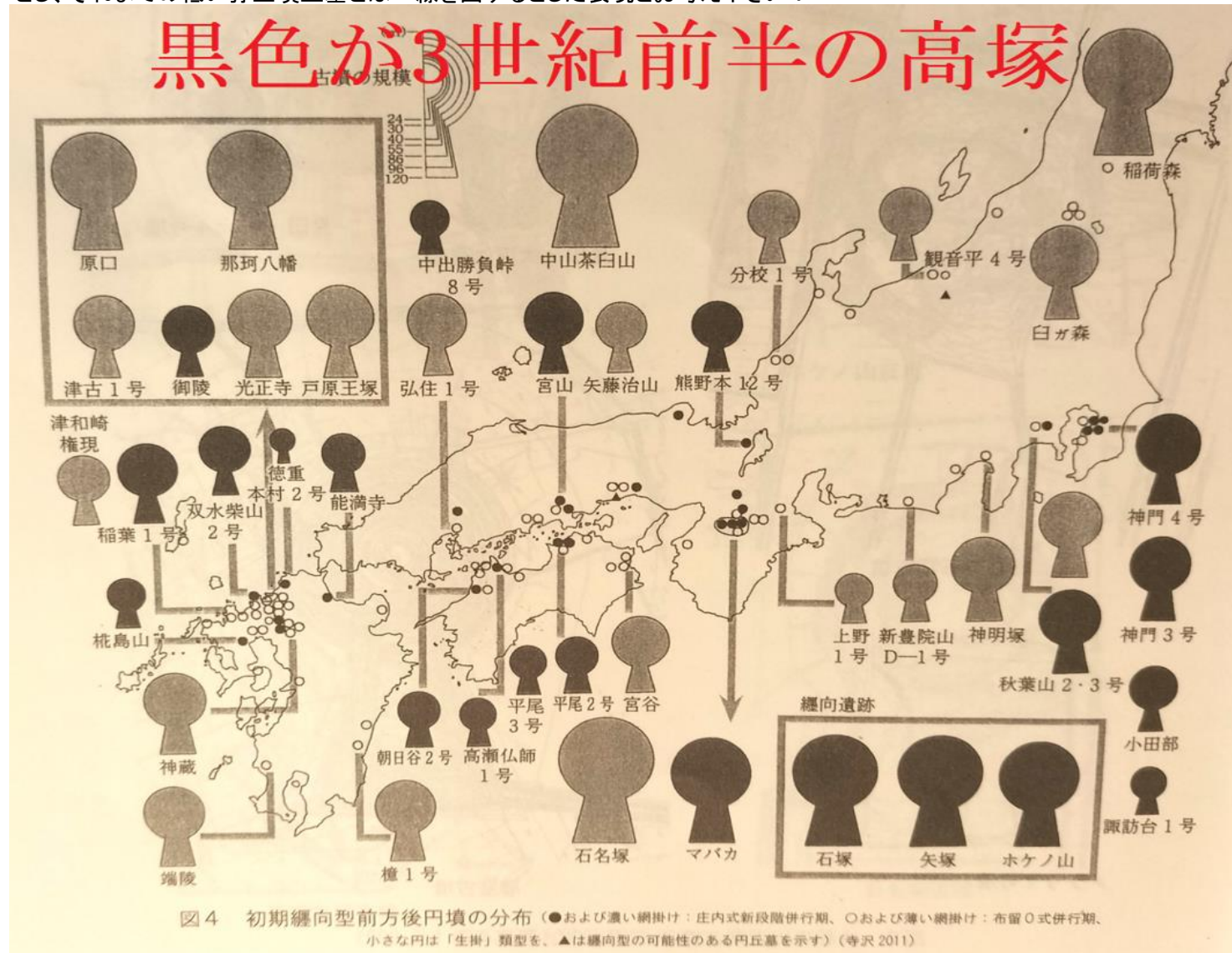


纏向型前方後円墳(桜井市)

3世紀には纏向の地に出現した纏向型前方後円墳が全国に波及しているようだ/「高塚」とは高い墳丘墓＝古墳のこととし、それまでの低い弥生墳丘墓とは一線を画するとした表現とお考え下さい！



2023年11月25日 東京フォーラム「前方後円墳創生」の配布資料に一部(赤字)加筆

纏向遺跡全景/纏向矢塚古墳から少し離れた右手に東田大塚古墳が所在する



「最新調査でわかった日本の古代史」/宝島社 より

《纏向石塚古墳》

正面が纏向石塚古墳/前方後円形の弥生時代終末期の墳丘墓(纏向型前方後円墳)/3世紀前半～中頃の築造/右手前が後円部、左奥が前方部/北側から見たところ



※ 築造年代は現地の説明板によるもので、最新の研究成果とは合致していない

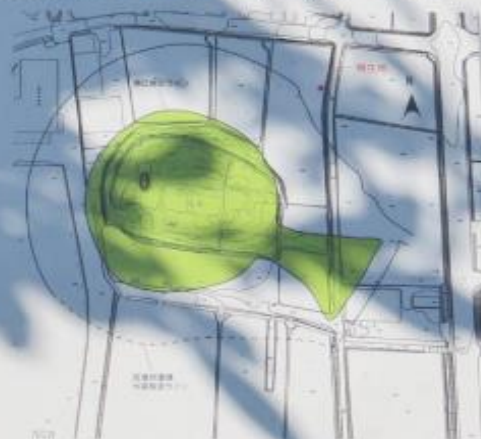


まき むく いし づか こ ふん ふん きゅう ぼ 纏向石塚古墳(墳丘墓)

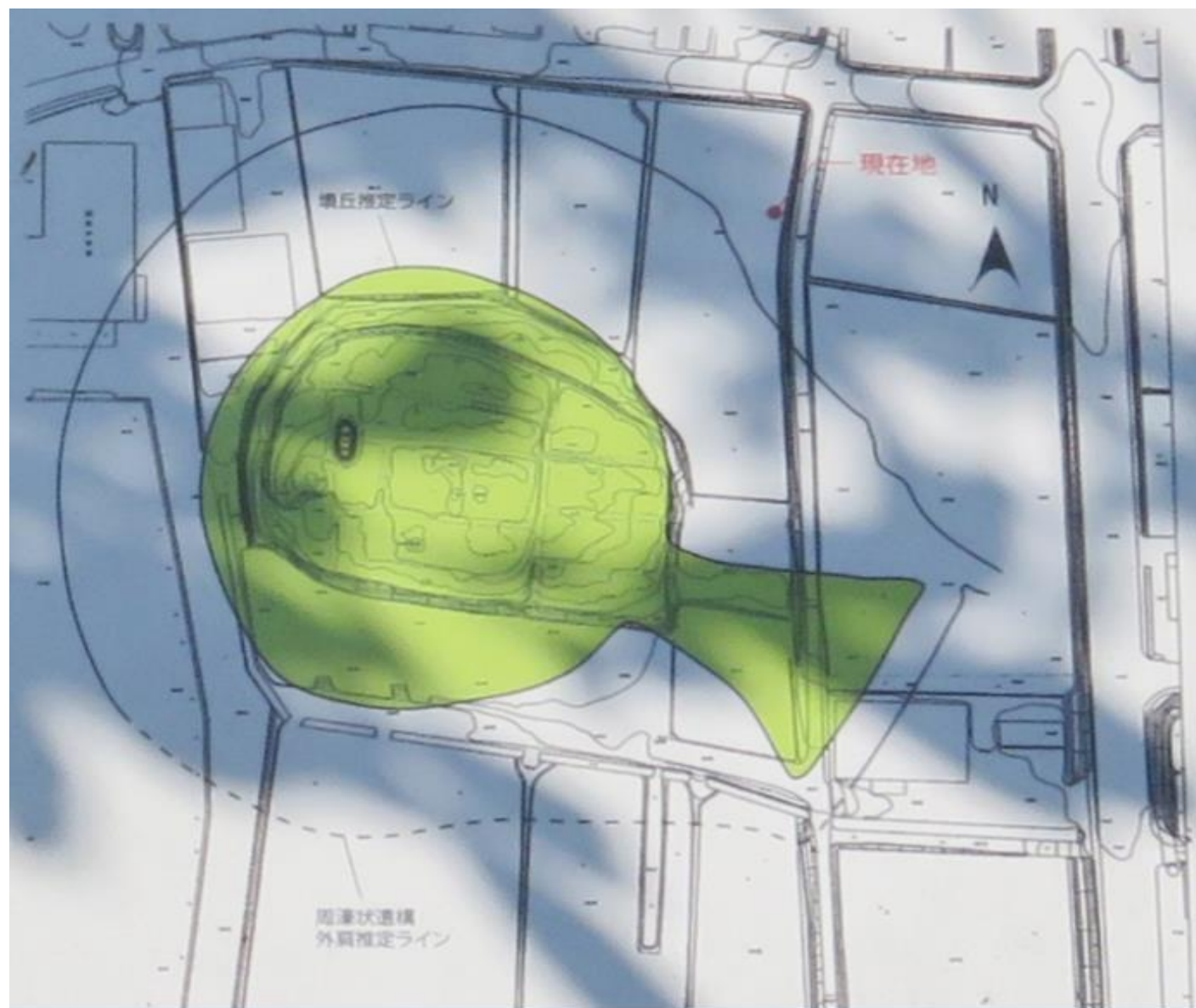
Makimukuisizuka burial mound

全長約96mの前方後円形の墳丘をもつ大型墳墓。
後円部径と前方部長の比率が2：1となる「纏向
型前方後円墳」の典型的な例とされています。

箸墓古墳などの定型化した前方後円墳が出現する以前の3世紀前半～中頃の築造と考えられ、のちの大型古墳に見られるような葺石や埴輪は存在しません。このため古墳時代初頭の「古墳」とする考え方がある一方で、弥生時代終末期の「墳丘墓」とする意見があり、古墳時代のはじまりを議論する上で注目される資料となっています。



桜井市教育委員会



南側から見たところ/左手が後円部、右手が前方部



説明坂の背後は周濠跡



御影縁石から3.25m 墳丘部
側に寄ったところが、周濠の昔
の水面と想定される位置です。



墳丘と周濠跡を見たところ/北側から見たところ



そこで、左手を見たところ



同じく、右手を見たところ



《矢塚古墳》

前方が矢塚古墳/前方後円形の弥生時代終末期の墳丘墓(纏向型前方後円墳)/3世紀中頃の築造/左手が後円部、右手が前方部/北西側から見たところ



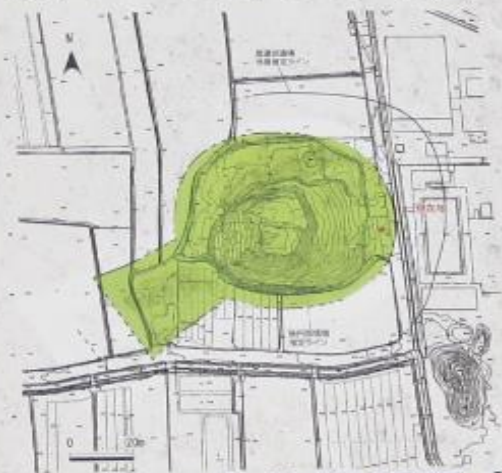


や づか こ ぶん ぶん きゅう ぼ 矢塚古墳(墳丘墓)

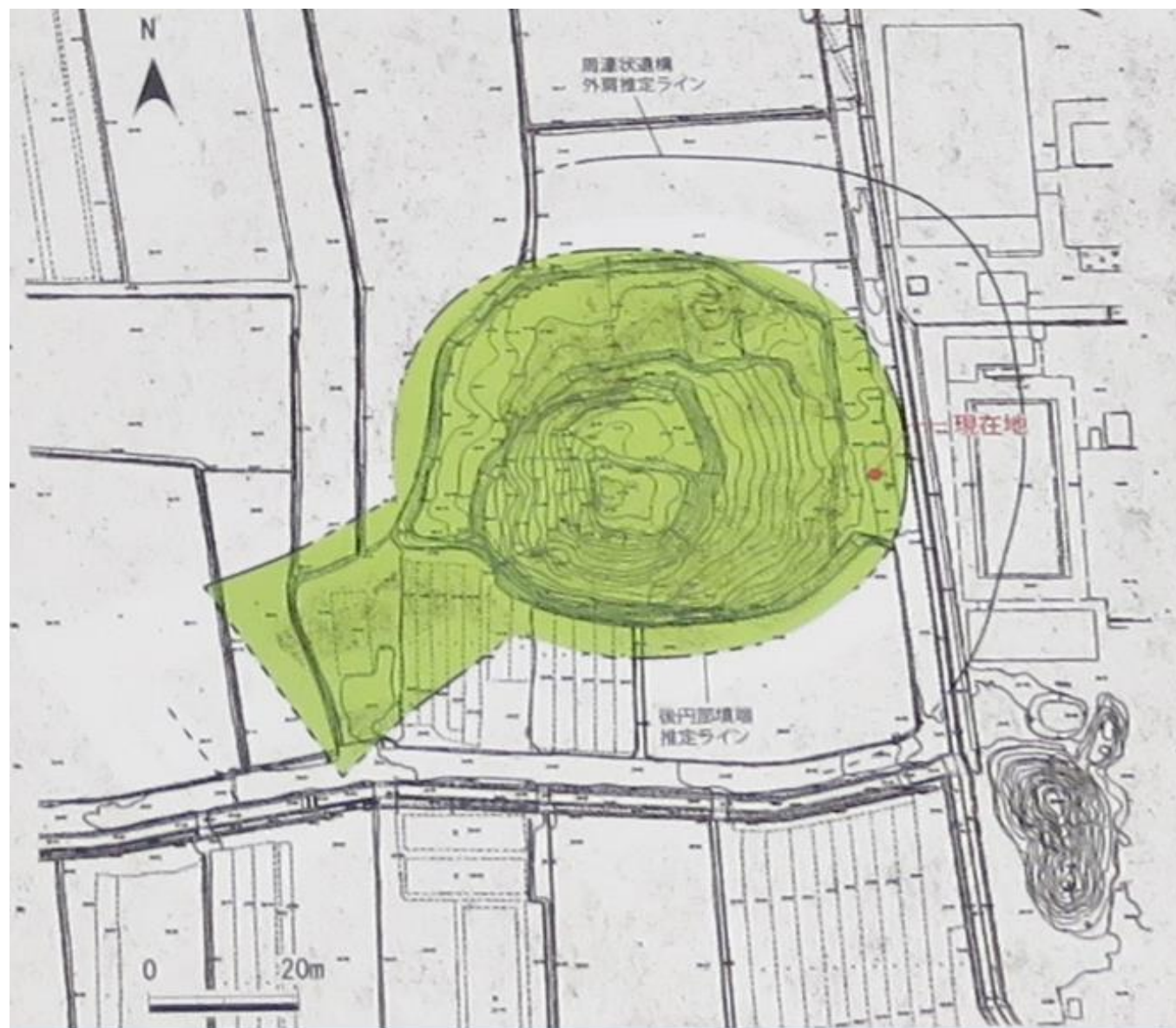
Yazuka burial mound

全長93m以上の前方後円形の墳丘をもつ大型墳墓。発掘調査により後円部は南北約56m、東西約64mとやや東西に長い形態であることが判明しました。周濠状遺構より出土した土器などから、定型化した前方後円墳が出現する以前の3世紀中頃の築造と考えられています。

後円部径と前方部長の比率が2：1となる「纏向型前方後円墳」の一例であり、纏向石塚古墳とともに前方後円墳の出現を考える上で重要な墳墓であるといえるでしょう。



桜井市教育委員会



左手前が前方部、右奥が後円部/南側から見たところ



左手が前方部、右手が後円部/南東側から見たところ



手前の周濠跡はこんな状態



後円部の墳丘を覗いたところ



《勝山古墳》

前方が勝山古墳/前方後円形の弥生時代終末期の墳丘墓(纏向型前方後円墳)/3世紀代の築造/左手前が前方部、右奥が後円部/北側から見たところ

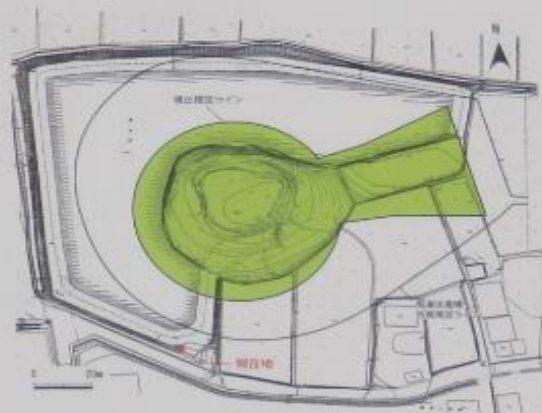




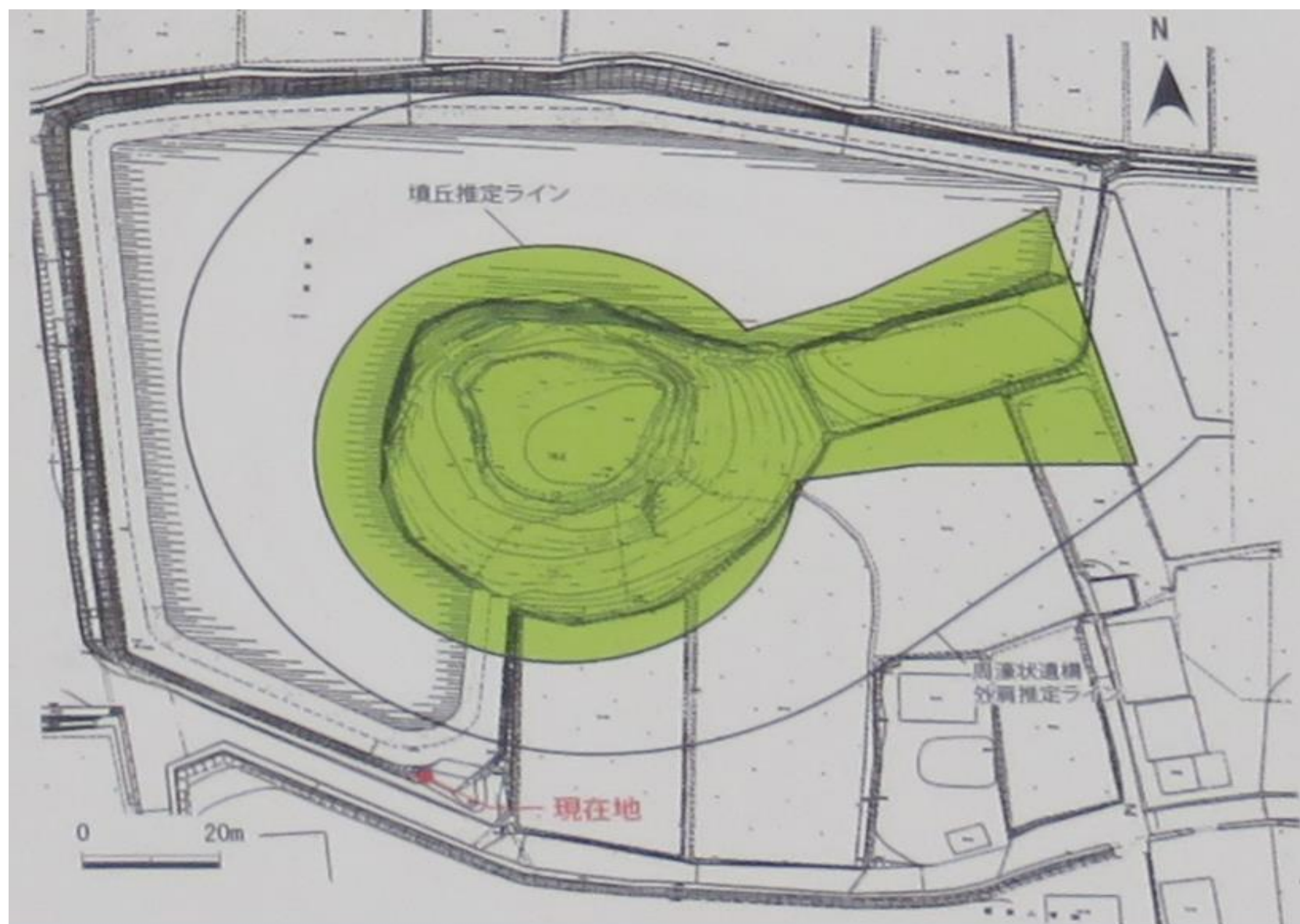
勝山古墳(墳丘墓)

Katsuyama burial mound

3世紀代に築造されたと考えられる大型墳墓で、前方後円形の墳丘は全長約115mを測ります。纏向石塚古墳と同様に、定型化した前方後円墳が出現する以前に築造された可能性が考えられています。埋葬施設の内容は不明ですが、墳丘の周囲をめぐる周濠状の遺構からは土器や木製品が多数出土しており、なかには建築部材やU字形木製品など特異なものも含まれていました。これらの遺物は、古墳出現期における墳墓祭祀を知る上で貴重な資料となっています。



桜井市教育委員会



右手に後円部を取り巻く周濠跡(現在は灌漑用水池として拡張されている)を見たところ



その先、後円部の後側の周濠跡を見たところ



後円部の後ろを見たところ/西側から見たところ



その右手を見たところ



反対側から周濠跡を見たところ/この辺りは埋まってしまっている



《東田大塚古墳》

正面は東田大塚古墳/前方後円墳/3世紀後半頃の築造/左手が後円部、右手が前方部/北西側から見たところ

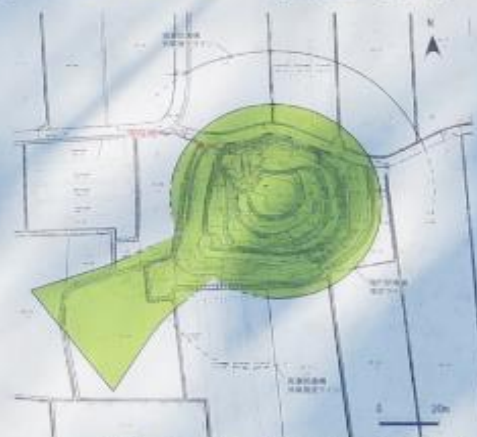




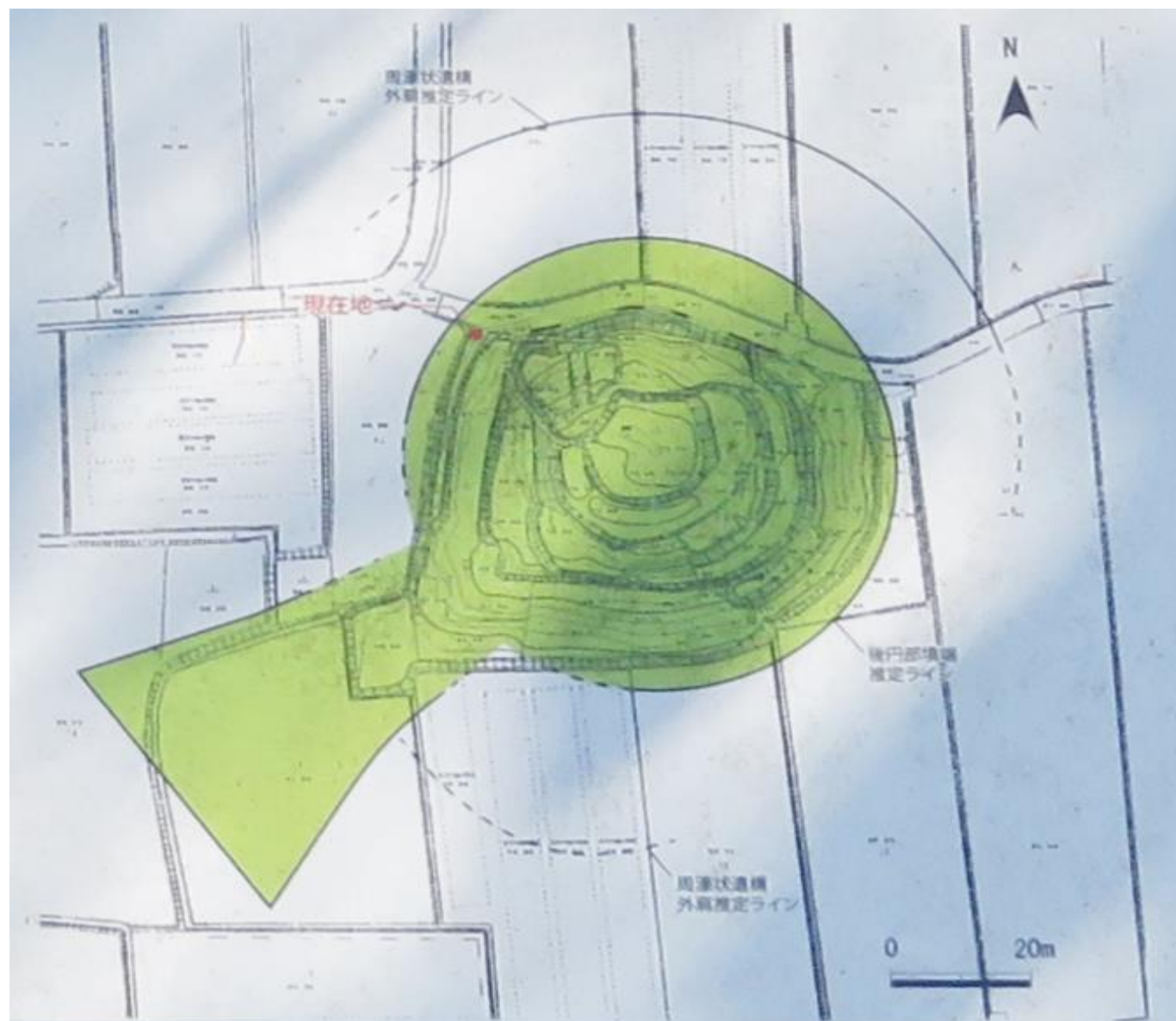
ひがい だ おお つか こ ぶん
東田大塚古墳
Higaidaotsuka burial mound

墳丘全長約120mの前方後円墳。現在は南西にのびる前方部が大きく削られています。纏向遺跡では箸墓古墳に次ぐ墳丘規模をもっています。埋葬施設の内容は不明ですが、古墳築造前後の遺構が確認されており、箸墓古墳とほぼ同時期である3世紀後半頃に築造されたと考えられます。

纏向遺跡ではホケノ山古墳とともに、築造時期が限定できる数少ない古墳の一つであり、出現期の前方後円墳の形態を知ることができる貴重な資料であるといえるでしょう。



桜井市教育委員会



手前の左手の周濠跡を見たところ



墳丘に登ってみよう



後円部の墳頂



そこから前方部方向を見たところ



前方部は大きく破壊されており、くびれ部の辺りしか残っていない/そこから後円部方向を見たところ



北東側から後円部を見たところ



《ホケノ山古墳》

これがホケノ山古墳/前方後円形の弥生時代終末期の墳丘墓(纏向型前方後円墳)/3世紀中頃の築造/手前が前方部、奥が後円部/南東側から見たところ



説明坂が立っている



史跡 纏向古墳群

ホケノ山古墳

ホケノ山古墳は、後の定型化した前方後円墳の成立につながるいくつかの要素を内包した初現的な古墳であり、纏向遺跡に所在するそれら「纏向型前方後円墳」と呼ばれる古墳の中では唯一その全体像が発掘調査により判明していることから、古墳の出現過程を考える上で貴重な例となっています。

全長は約 80m、後円部径約 55m、前方部長約 25m であり、墳輪はもとず、二段以上の段築と葺石も確認されています。

後円部の中央からは「石囲い木槨」と呼ばれる木材でつくられた槨の周囲に河原石を積み上げて石囲いを造るという二重構造を持った埋葬施設が確認され、中には舟形木棺が置かれていたと推測されています。



画文帯同向式神獣鏡

副葬品には、画文帯同向式神獣鏡の

完形になるものと破片が 1 面ずつと、破片化した同一個体の内行花文鏡が複数片、素環頭太刀一口を含む鉄製刀剣類、鉄製農工具、多量の銅鉄・鉄鏃などがあり、他にも出土状況から石囲い木槨の蓋上にあつたと推測される加飾二重口縁壺



銅鉄

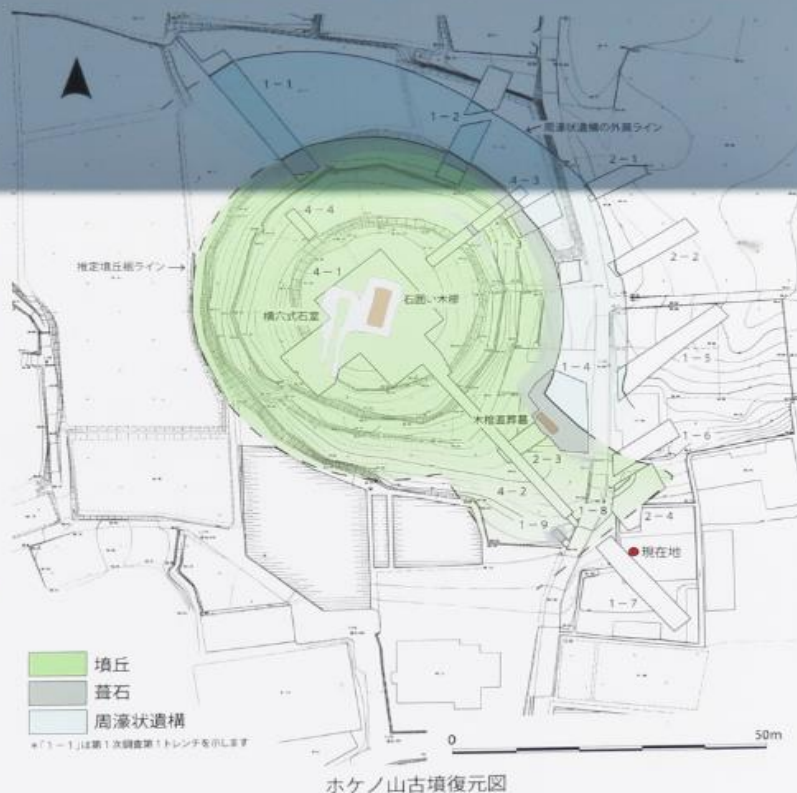
や小型丸底鉢が確認されました。

埋葬施設の構造やこれらの副葬品などから、古墳の築造の時期は 3 世紀中頃と考えられています。

また石囲い木槨の西側からは、墳丘を再利用し築かれた 6 世紀末頃の横穴式石室が検出されました。



加飾二重口縁壺



ホケノ山古墳復元図



ホケノ山古墳の墳丘



石囲い木槨

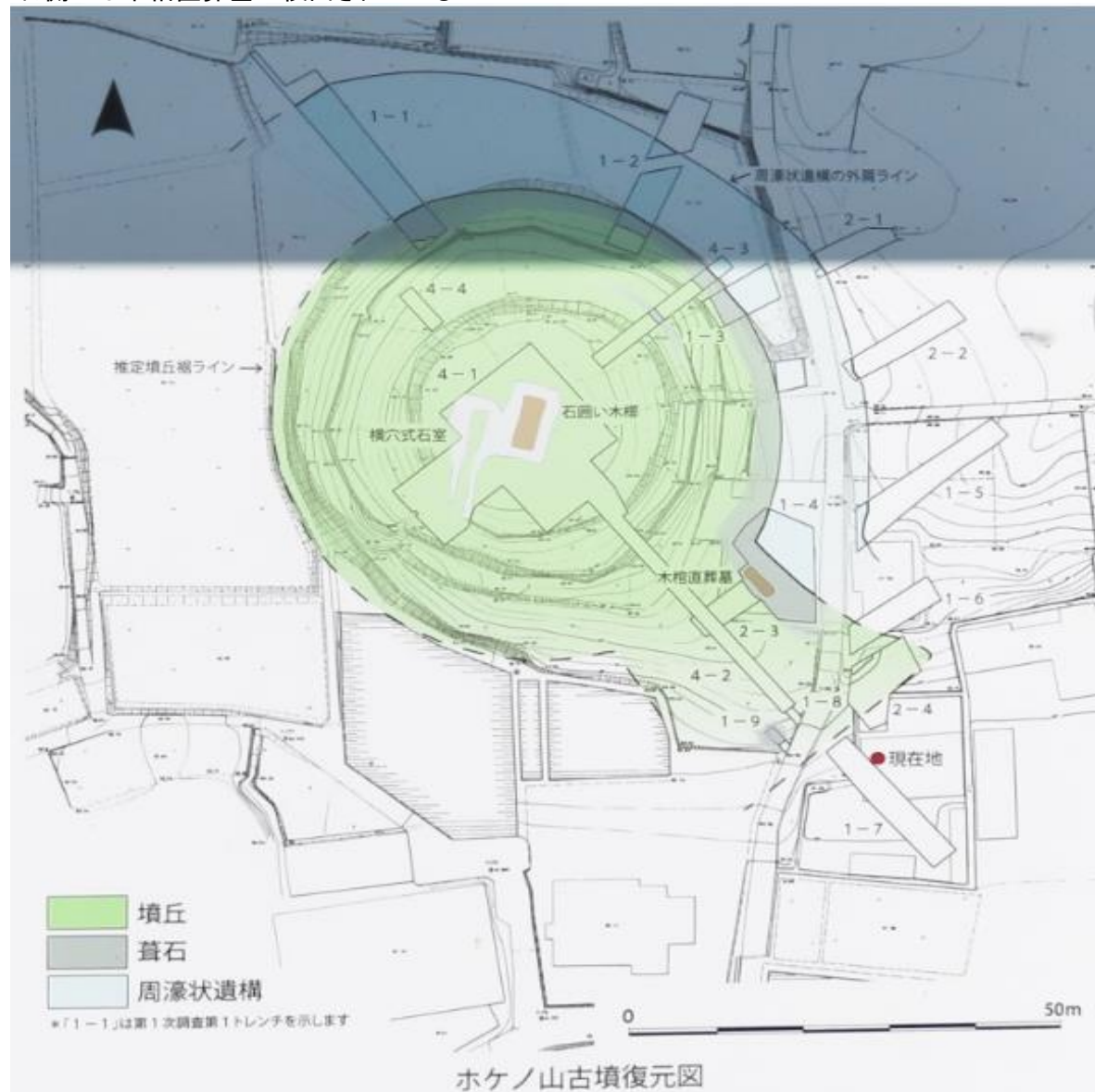


横穴式石室と家形石棺

写真提供：奈良県立橿原考古学研究所
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

史跡指定日：平成 18 年 1 月 26 日 桜井市教育委員会

後円部中央の「石囲い木槨」の他、その西側に6世紀末頃の横穴式石室が、更にくびれ部
右側には木棺直葬墓が検出されている



手前は前方部の葺石



その向こうに、くびれ部右側の木棺直葬墓が復元されている



こんな塩梅



前方部東斜面検出の埋葬施設



歴史街道

ここに復元しているのは第二次調査において確認された埋葬施設です。墓壙の規模は全長四・二m／幅一・二m残存する深さは三十～五十cmになります。

墓壙内には南端に大型複合口縁壺が、中央には底部を穿孔した広口壺が共伴し、これに挟まれるように全長二・二五m／幅四十五cm、現存する深さ十五cmの組み合わせ式木棺の痕跡が確認できました。

また、木棺内部の南側からは四十×四十五cmの範囲に薄く撒かれた水銀朱も検出されています。これらの状況からこの墓壙は埋葬に木棺を用い、複合口縁を有する大型壺・底部に穿孔のある広口壺を供献した埋葬施設である事が確認されました。

この埋葬施設は葺石をはずして、裏込め土から地山まで掘り込んで作られており、墳丘が完成した後に設置されたものと考えています。また、構築の年代については供献土器以外には全く副葬品が見られなかったため、供献土器の年代に頼らざるを得ません。

これらの土器は、概ね三世紀後半の中に治まるものであり、他の墳丘や周濠に伴って出土した土器の年代と大きく矛盾することはないと考えられます。

右手から見たところ



後円部側から見たところ



これは後円部墳頂



そこから北西方向を見たところ



左手を見ると、前方に箸墓古墳が見える/東側から見たところ



振り返って東方向を見たところ

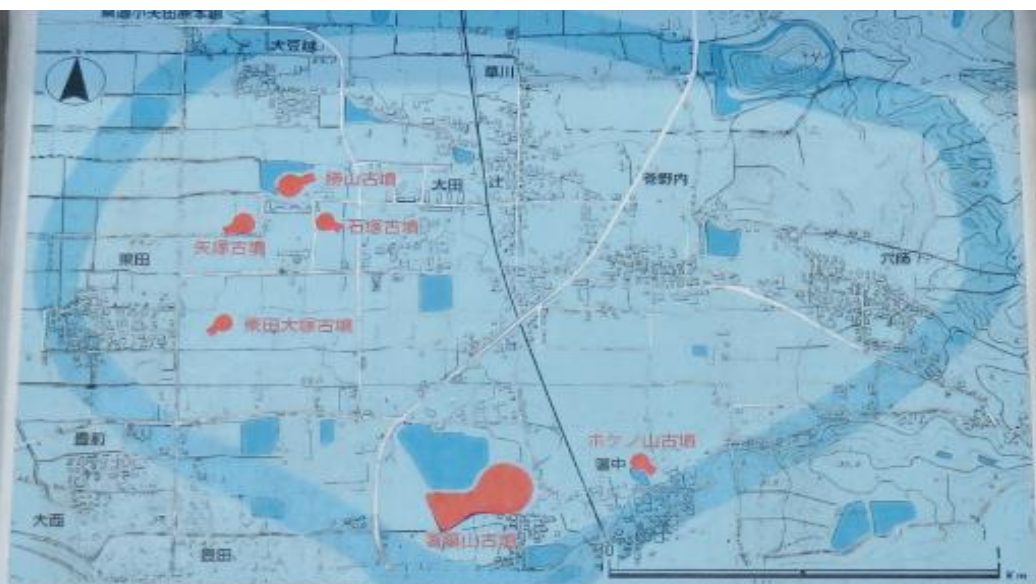


これは後円部から前方部方向を見下ろしたところ



ここにも説明坂がある/北東側から見たところ





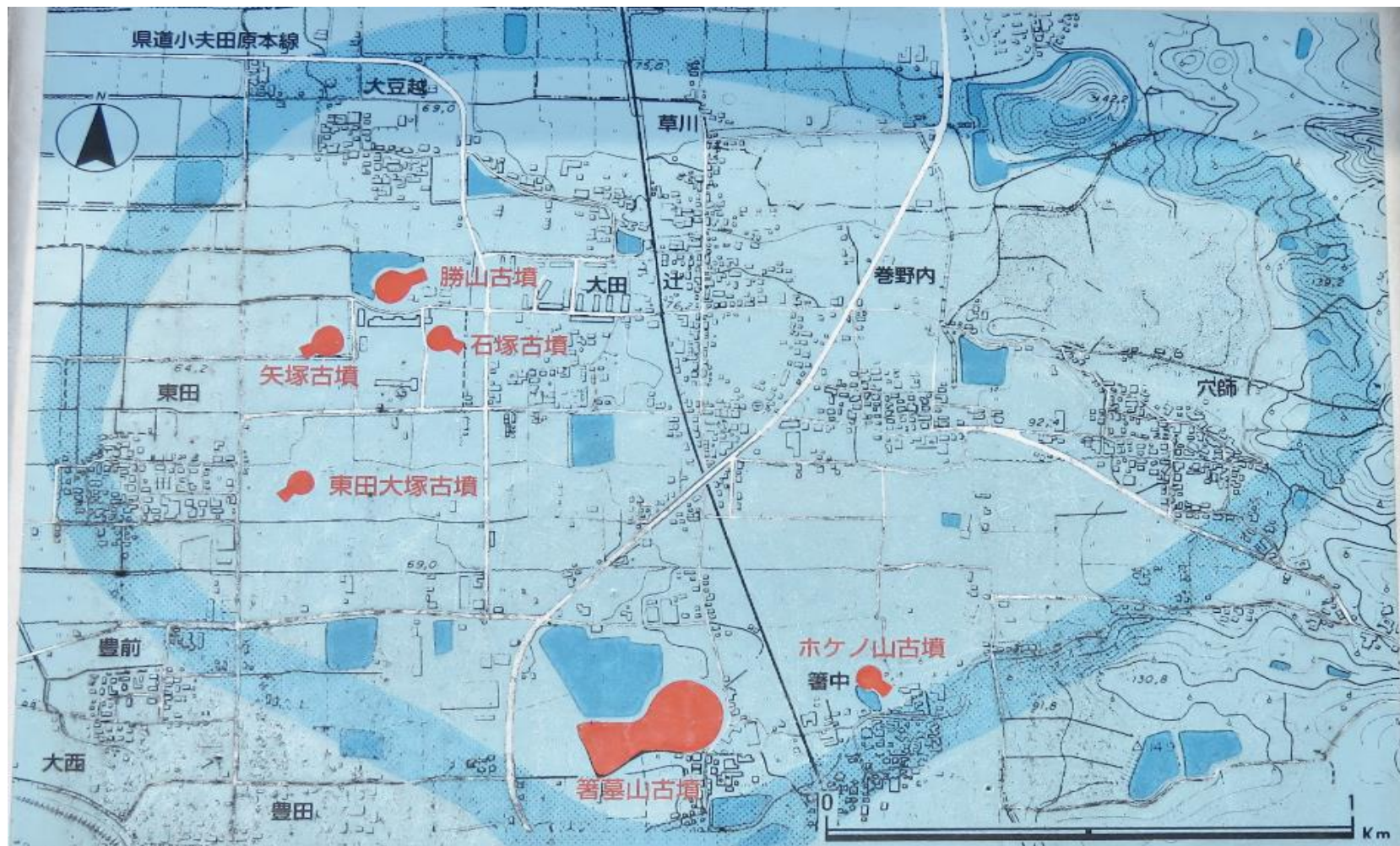
ホケノ山古墳と纏向古墳群



歴史街道

ホケノ山古墳の周囲には纏向遺跡がひろがっています。纏向遺跡は東西約2km南北約1・5kmの古墳時代前期の大きな集落遺跡であり、初期ヤマト政権発祥の地として、あるいは北部九州の諸遺跡群に対する邪馬台国、東の候補地として全国的にも著名な遺跡です。この遺跡は三世紀初めに出現し、およそ百五十年後の四世紀中頃には消滅してしまします。

遺跡の中には箸墓古墳を代表として、纏向型前方後円墳と呼ばれる石塚古墳・矢塚古墳・勝山古墳・東田大塚古墳・ホケノ山古墳の六基の古式の前方後円墳があります。これらの古墳は、その築造時期がいずれも三世紀に遡るものと考えられており、前方後円墳で構成された日本最古の古墳群と言えるでしょう。



北東側から後円部を見たところ/二段以上の段築が見て取れる



そこで、左手を見たところ



同じく、右手を見たところ/周濠の様子も見て取れる



ホケノ山古墳の周濠状遺構



歴史街道

ホケノ山古墳では水をたたえるような周濠は確認されていませんが、古墳を東側の尾根から切り離すために掘削された周濠状遺構が確認されています。ここには縁石で周濠状遺構の肩のラインを示しています。

周濠状遺構は墳丘の東側と北側の調査区で確認されており、幅は狭い所で十・五m、広い所では十七・五mありました。過去の調査の中で最も西側に設定された第一次調査の第一トレンチからは少量の加工木とともに、数多くの土器片が出土し、これらは古墳の築造時期を推定する手がかりとなっています。

周濠状遺構の平面形態は後円部側では墳丘に沿って丸く廻っていましたが、前方部側では一部でしか確認されず、はっきりとした形は解っていないため、ここでは前方部に沿って外へと開いていく案に基づいてその形を復元しています。

後円部を後ろ(北西側)から見たところ

 [video](#)



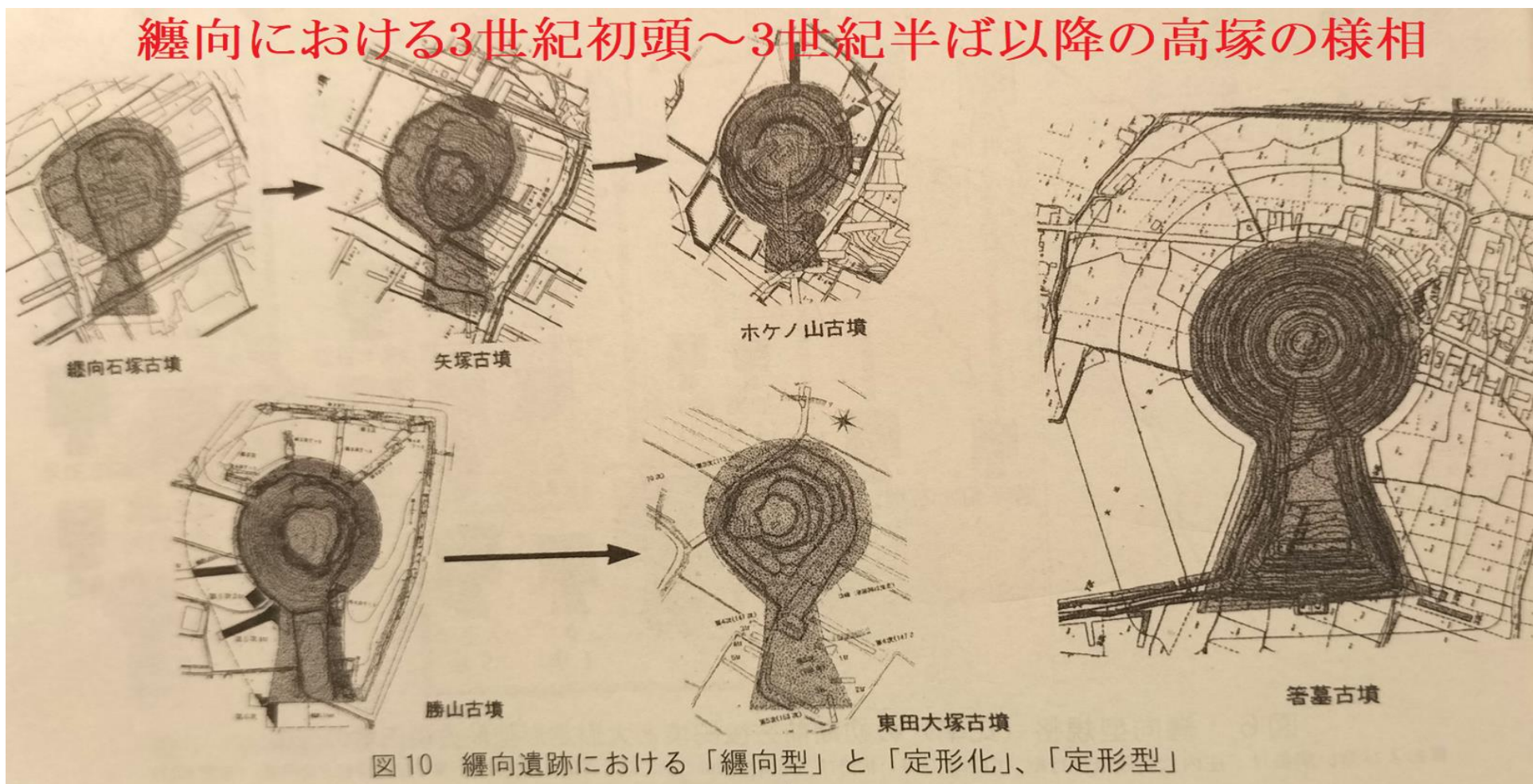
そこで、左手を見たところ



同じく、右手を見たところ



さて、最新の研究によると、畿内のいわゆる「纏向型前方後円墳」も、3世紀前半に「纏向型」から「定形型」への「定形化」のプロセスが見られるという/
「纏向型前方後円墳」は後円部径と前方部の長さの比率がほぼ2:1とされていたが、「定形化」をしている古墳が認められるようだ(勝山古墳→東田大塚古墳→箸墓古墳の流れが「定形化」のプロセスで、前方部の比率が次第に長くなってくる)



2023年11月25日 東京フォーラム「前方後円墳創生」の配布資料に一部(赤字)加筆

なお、「高塚」とは高い墳丘墓＝古墳のこととし、それまでの低い弥生墳丘墓とは一線を画するとした表現とお考え下さい！

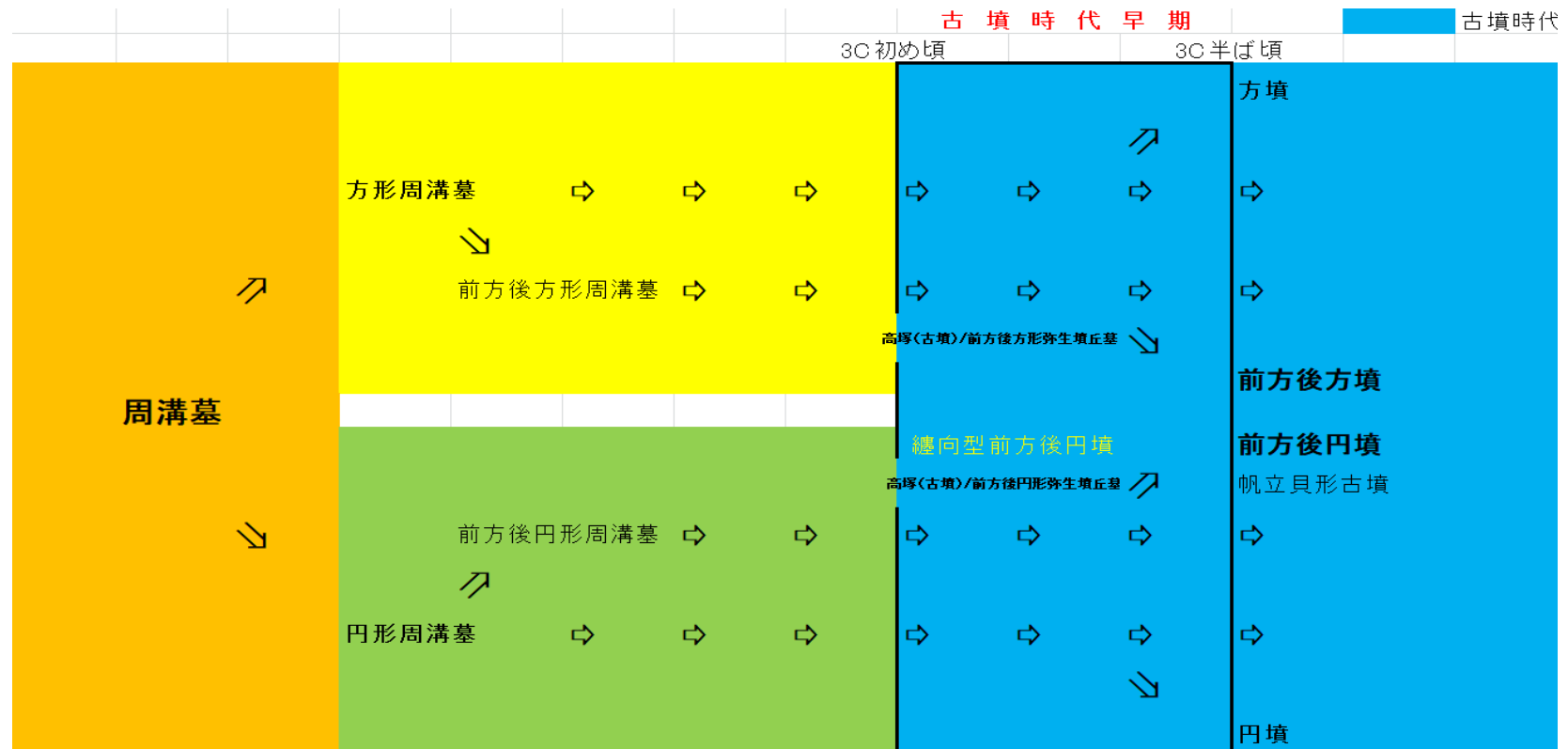
纏向型前方後円墳という概念を、後円部径と前方部の長さの比率がほぼ2:1のものとする「狭義の纏向型前方後円墳」に拘らず、「定形化」のプロセスにあるものも含めて広義の纏向型前方後円墳と捉えれば、弥生時代の主な墓制である周溝墓（墳丘があるものもあるようだが、遺体が目線の上に安置されるほどの高さはにはならない低墳丘墓）から遺体を目線から大きく上に安置し、求心力や結合を図る機能が付加され始める高い墳丘墓（纏向型前方後円墳/高塚、つまり古墳）に移行し（画期）、各地に波及し始める3世紀初め頃から箸墓古墳出現までの時代は実質的には古墳時代ということになるのかもしれない！

なお、以下の別稿を参照してください！

- ・ [神門5号墳（市原市）](#)

- ・ 那珂八幡古墳（福岡市）
- ・ 原口古墳（筑紫野市）
- ・ 双水柴山古墳群（唐津市）

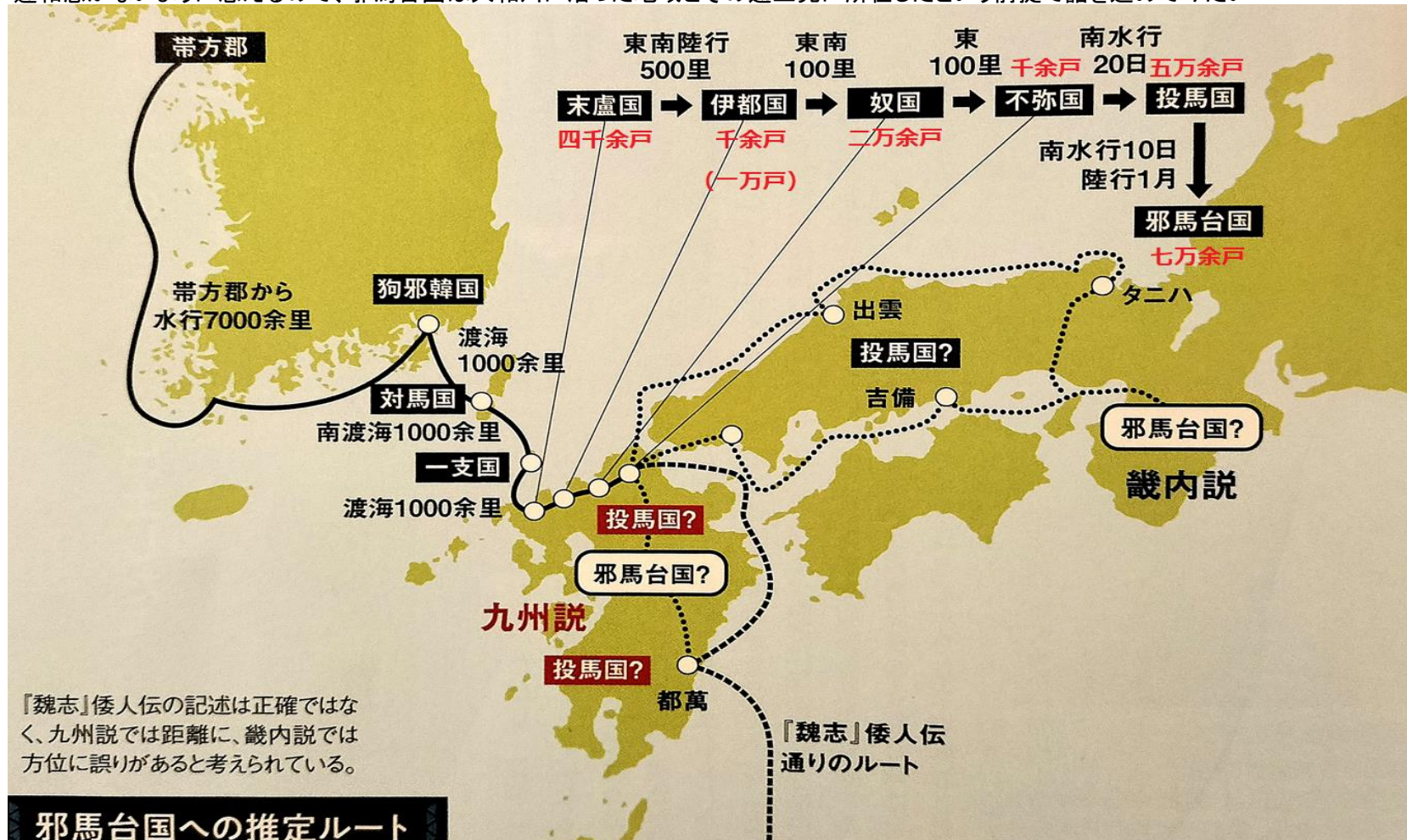
下図は周溝墓から画期を経て、様々な古墳が築造されていくプロセスを図式化した試案



※ 弥生時代中期以降に出現し、日本海沿岸に波及した「四隅突出型墳丘墓」も高塚であり、古墳と呼んで良いと思われるが、「纏向型前方後円墳」のように倭国全体に波及してはいないということから、その時点はまだ弥生時代という括りになろうかと思われる

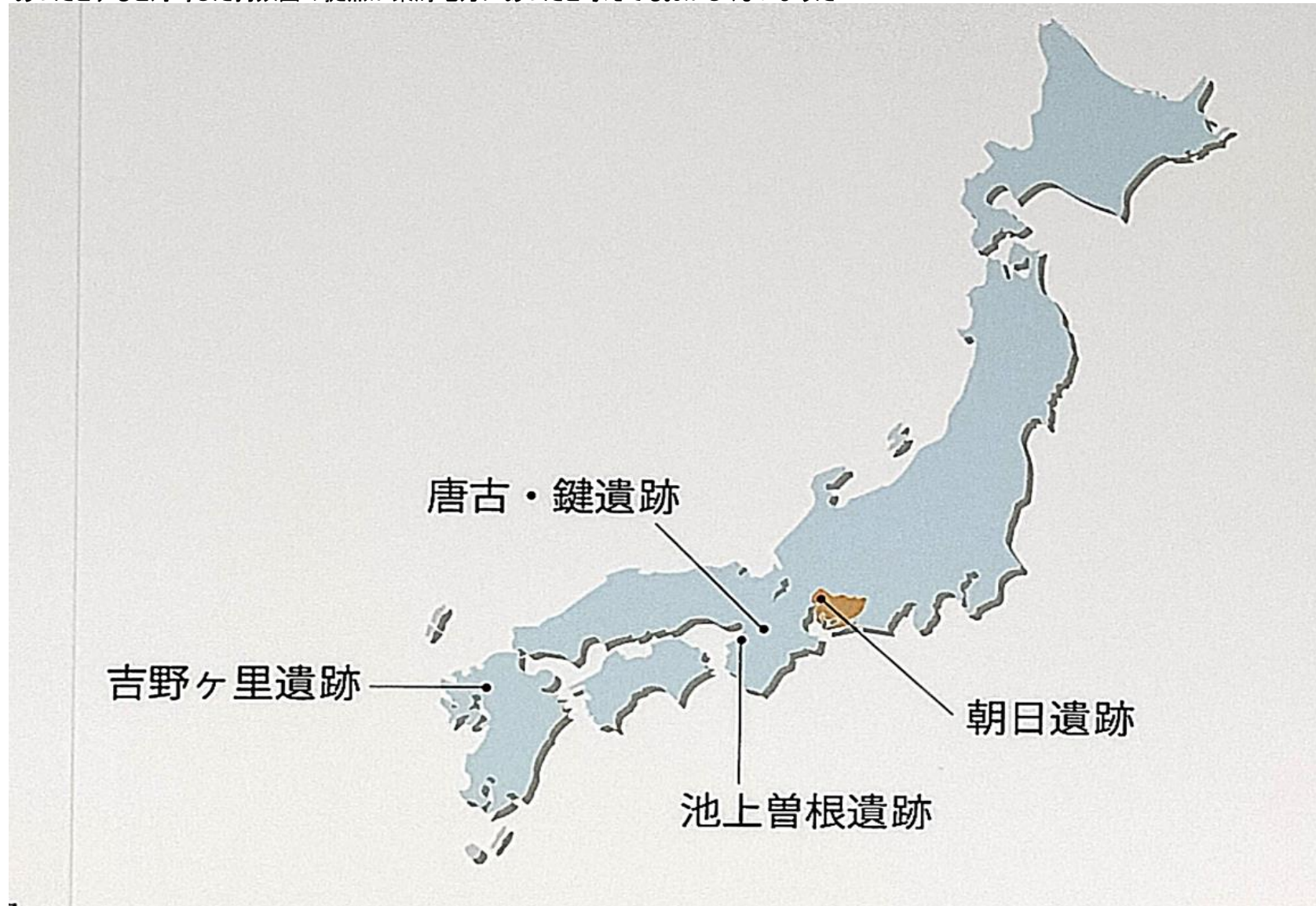
ところで、上記の纏向の地に造営された纏向型前方後円墳の被葬者は一体誰であろうか！？
この疑問に迫ってみたい。

邪馬台国の所在地については諸説あるようだが、ここでは魏志倭人伝の方位の記述が、当時の中国王朝では「倭国は南の方向に細長い」という認識であった可能性があるということらしいので、東を南と記されたとして下図を見てみると、不弥国から日本海ルートで出雲(対馬国)～タニハから氷上回廊を通して畿内(邪馬台国の所在地)という行程が、魏志倭人伝の水行・陸行の日数に一番違和感がないように思えるので、邪馬台国は大和川に沿った地域とその遡上先に所在したという前提で話を進めてみたい



「今こそ知りたい 日本の古代史」/宝島社 より 一部(赤字)加筆

「あいち朝日遺跡ミュージアム」のキャプションにあった「弥生巨大集落の大きさ比較」の遺跡位置を見てみると、畿内に邪馬台国があったとすると対峙した狗奴国の拠点が東海地方にあったと考えてもおかしくないようだ…



2世紀には5つの勢力が大きなブロック連合(物流ネットワーク)を形成していたようだ

2世紀頃の5大勢力

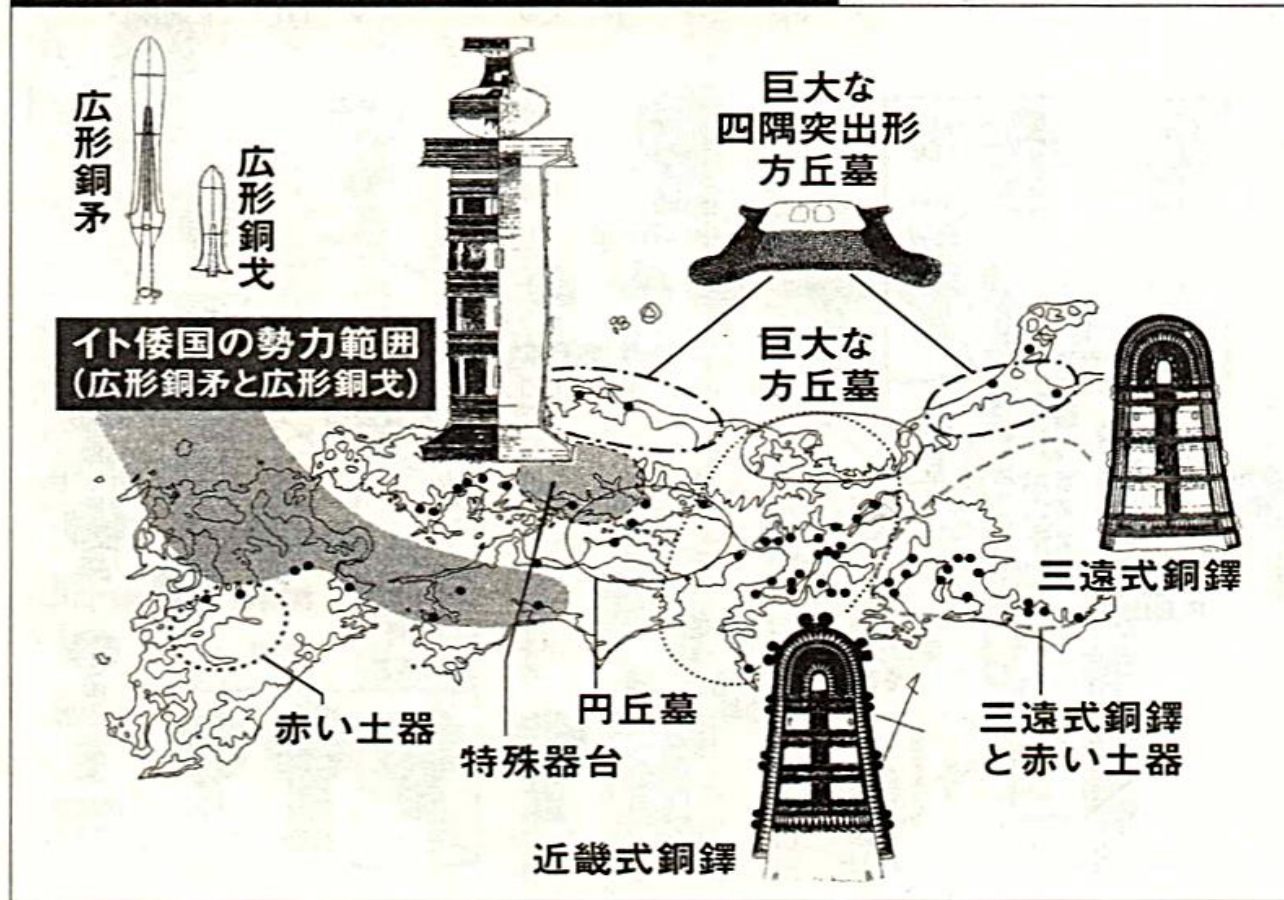


弥生時代のクニグニは自給自足ではなく交易を行っていた。交易によって各地域ネットワークが形成され、物流センターとなったクニを中心に5つの勢力が形成された。

「最新考古学が解き明かす ヤマト建国の真相」/瀧音能之 より

それは、それまでの祭祀方法を共有した地域に符合する

図3 倭国乱の頃の地域勢力とそのシンボル



2世紀後半、後漢王朝が衰退するとイト倭国の支配力や権威に影を落とし、各地域の首長墓やマツリに新たな変化が現れはじめた。

「最新考古学が解き明かす ヤマト建国の真相」/瀧音能之 より

「最新考古学が解き明かす ヤマト建国の真相」/瀧音能之 の要旨によると、北部九州では1世紀に奴国、2世紀に伊都国が盟主となった(中国大陸や朝鮮半島との交易におけるアドバンテージ)が、2世紀後半になると倭国大乱(178年～184年あるいは146年～189年)/鉄を中心とする物流システムの再編成が起こったとされる

当時の中国王朝への朝貢の推移を見てみると、

57年 「漢委奴國王」印

107年 倭国王・師升(師升は伊都国の王?)

についての記述があり、その後、倭国大乱が起こったとされる(1世紀後半頃は奴国、2世紀前半頃は伊都国の時代ということになるようだ)

さて、倭国大乱の様相を見てみると、次のようなプロセスを踏んでいるらしい(赤字の部分など私見を含みます)

◆ 倭国大乱(178～184年)

第一次倭国乱(物流ルートの確保をめぐる対立)

背景: 氷上回廊ルートを巡る軋轢

結果: 畿内と瀬戸内海中部が結びつく

第二次倭国乱(畿内連合・瀬戸内海中部連合VS北部九州連合)

背景: 後漢王朝の衰退

結果: 畿内・瀬戸内海中部と北部九州が結びつく

◆ 卑弥呼の共立(畿内連合の中核である邪馬台国の内陸部を拠点とした女王国連合の成立)/第一次女王国/3世紀初め頃

邪馬台国の所在地は畿内の大和川沿いの広いエリアにあり(奴国の3.5倍?)、それまではあまり開発されていなかった纏向の地を、
畿内連合・瀬戸内海中部連合・北部九州連合のリーダーが結集して卑弥呼を共立した女王国の拠点としたのでは・・・

なお、邪馬台国のエリアは大和川沿いに展開する加美・久宝寺遺跡群、東郷・中田遺跡群などや唐古・鍵遺跡を含むと思われるが、
纏向の地は含まれていなかったのでは・・・つまり、纏向の地は3世紀になる頃に弥生時代の拠点集落を凌駕する大規模遺跡として
突如出現したエリアだったのではなかろうか

その後の動きをまとめると次のようになるようだ

- ◆ 220年 後漢王朝の滅亡
- ◆ 239年 卑弥呼が魏に朝貢
親魏倭王/名実ともに倭国の統一王(ただし、東海連合・出雲連合は加わらず)/初期ヤマト王権の誕生
出雲国が女王国政権に帰順する
- ◆ 247年 卑弥呼が帯方郡に狗奴国と戦っている状況を報告
- ◆ 魏から張政(魏の軍事顧問)が卑弥呼政権のもとに檄文と錦の御旗を持って派遣される
- ◆ 248年、卑弥呼死す～男王(執政王)～卑弥呼の宗女:台与
台与を倭王とする女王国が続く(第二次女王国)
狗奴国が女王国政権に帰順する
- ◆ 張政が台与からの丁寧な返礼とともに魏に帰国する

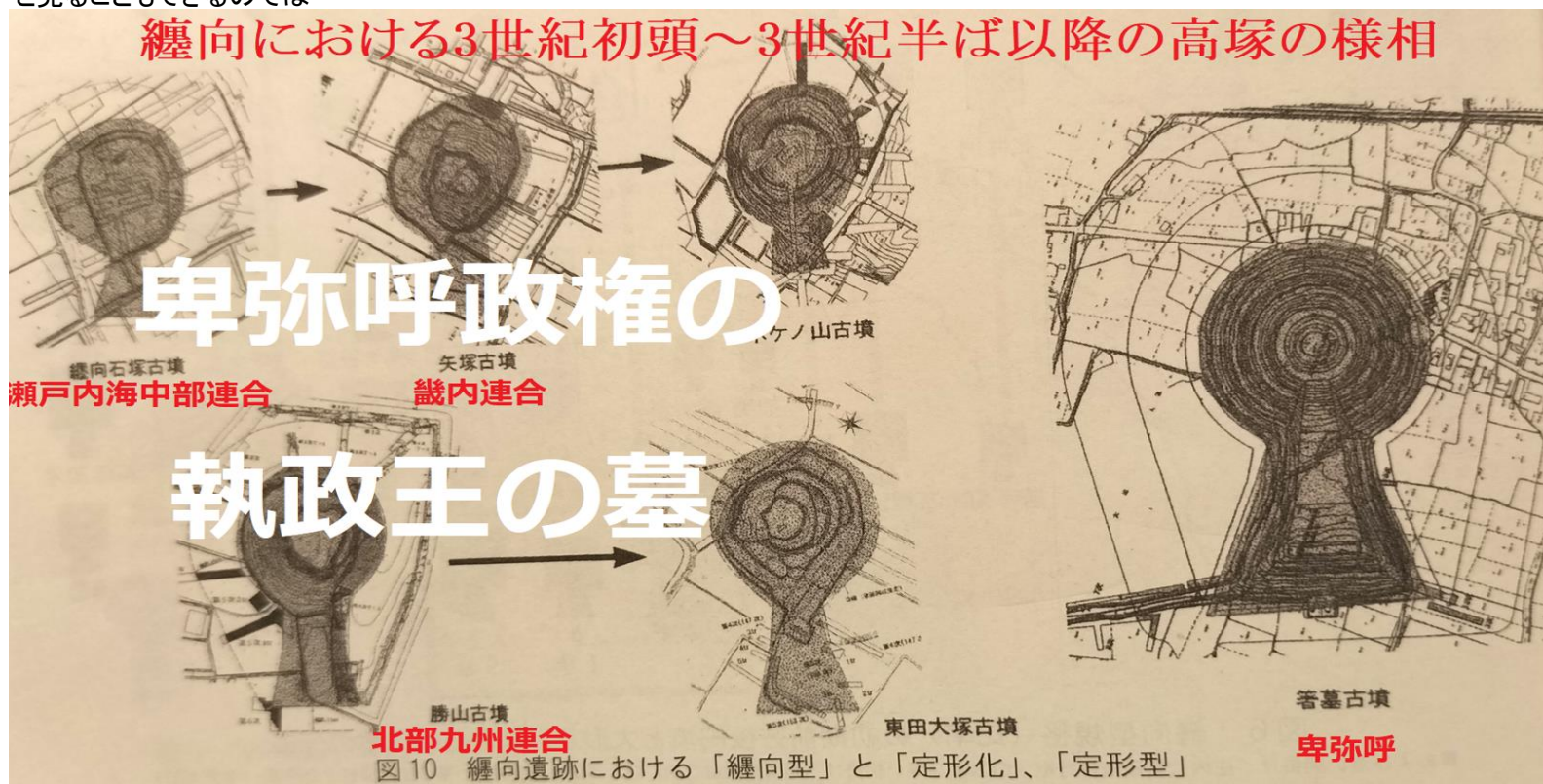
- ◆ 265年 魏滅亡
- ◆ 266年 台与が西晋に朝貢
- ◆ 箸墓古墳が造営され、定形型の前方後円墳を共通の祭祀形態とした倭国が確固たる体制を確立した
なお、箸墓古墳の造営時期であるが、上記の流れで考えると260年前後では・・・

魏志倭人伝には卑弥呼は248年頃に亡くなったとあり、箸墓古墳は台与政権が確固たる倭国としての体制を確立した頃（つまり、出雲連合・東海連合も加えた倭国としての体裁が整った頃）に、定形化された前方後円墳を倭国の共通の祭祀形態として採用することによって、倭国をまとめるシンボルとして、纏向の地に女王国の奥津城を造営したのではないだろうか（卑弥呼の遺骸はそれまでは別の墳墓～たとえば三輪山の中腹辺り！？～に埋葬されており、再葬墓の形をとって箸墓古墳に納められたとみてはどうだろうか（箸墓古墳の被葬者は卑弥呼！？）

ところで卑弥呼の死後、13才の台与が女王国を引き継ぐことになるわけだが、その台与が祭祀のみならず政治・軍事的運営を成し得たかと言えば、そんなことはあり得ないとするのが自然と思われるが・・・つまり、台与は祭祀を司る神聖王（祭祀王）で、政治・軍事的執行をサポートする執政王の存在が欠かせないのでは・・・祭祀王は権威、執政王は権力の二重統治体制であったということでは・・・卑弥呼も然りで、卑弥呼・台与はシャーマンであり、祭祀王として崇められたが、実務（政治・軍事的な執行）は執政王としての男王が各連合の協業で遂行していたと思われる

上記のことを踏まえると、纏向の地に造営された纏向型前方後円墳の被葬者は一体誰であろうか！？

3世紀前半に出現した纏向型前方後円墳は卑弥呼政権（第一次女王国政権）を政治・軍事的に支えたリーダー達（執政王）の墓と見ることもできるのでは・・・



2023年11月25日 東京フォーラム「前方後円墳創生」の配布資料に一部加筆

なお、「高塚」とは高い墳丘墓＝古墳のこととし、それまでの低い弥生墳丘墓とは一線を画するとした表現とお考え下さい！

纏向遺跡から出土した外来系土器からは、3世紀代最大の集落である纏向の地に、西は九州から東は南関東地域にいたる広い範囲から人々が移動、地域間の交流があったことが見て取れるという

東海系鉢

東海系S字甕

外来系土器の地域

近江系

北陸系

山陰系

南関東系

東海系

河内系

阿波系

吉備系

*各地域の範囲は遺時点での推定です

纏向に集う人々

纏向遺跡では、大和以外の地域でつくられ持込まれた土器（搬入土器）や、他の地域の影響を受け大和の土でつくられた土器が数多く出土しています。これらは外来系土器と呼ばれます。

過去の調査における外来系土器の割合は、調査地点にもよりますが、出土した土器の約15～30%にも上がることがわかっています。纏向遺跡へ土器を搬入した地域は、西は九州から東は南関東地域にいたる広い範囲にわたっていることがわかっており、特に東海地域の特徴をもったものが目立ちます。このような状況は、他の遺跡ではあまり見られず、纏向遺跡の一つの大きな特徴といえます。

こうした土器の動きは、人々の移動や地域間の交流を示しており、3世紀代最大の集落である纏向の地に多くの人々が集っていたといえるでしょう。

墳丘盛土内出土土器

排水溝

纏向石塚古墳墳丘図

纏向型前方後円墳の一例と出土土器

導水溝出土土器

縄文時代後期の石塚古墳出土土器
古墳時代前期3世紀

壺形土器（複製品）

ホケノ山古墳出土土器
古墳時代前期

後円墳の特徴

大きく低平な前方部を持ち、
前方部長の比率が正しく3：
になっていること。

形のものは少なく、扁球形・
は不整円形を呈すること。

前方部までは極めて緩やかなス
って移行するため、平面的には後
部間に「連結部」を形成する場合
。

するものは前方部前面を欠くかあ
極めて矮小であること。

前方後円墳の創出

纏向の地に「前方後円墳」がつくり出されます。
これは弥生時代にはなかった新しい墓の形で、纏向
で成立したのち、古墳の造り方やマツリの方法など
が全国に広がっていきます。纏向遺跡における最大
の前方後円墳は箸墓古墳です。築造された年代は3
世紀後半（布留0式期）と考えられています。

また、遺跡内には3世紀代に築かれたと考えられ
る出現期の古墳があります。国史跡である纏向石塚
古墳・ホケノ山古墳をはじめ、矢塚古墳・勝山古墳・
東田大塚古墳などの前方後円墳です。これらの古墳
のなかには、一定の築造企画のもとにつくられたも
のもあることが判明しており、その成立の地の名前
をとって「纏向型前方後円墳」と呼ばれています。
さらに、この企画はメクリ1号墳のような前方後方
墳にも適用されたと考えられています。

大量の桃核(桃の種)が積まれている



仮面を用いた祭祀の存在を示す木製仮面が見える



弧文石、弧文板、特殊器台型埴輪が見える



この展示は、縄文時代から古墳時代にかけての道具と土器を紹介しています。

道具類:

- 砥石:** 石の磨き道具。
- 弧文板:** 縄文時代の文様板。
- 頭状木製品:** 縄文時代の木製品。
- 縄の羽口:** 縄文時代の縄の口。
- 鍛冶滓:** 鍛冶の滓。
- 山陰系甕:** 山陰系の甕。
- 纏向遺跡出土鉄器:** 纏向遺跡出土の鉄器。

土器類:

- 阿波系釜:** 阿波系の釜。
- 系甕:** 系の甕。

これらの道具と土器は、当時の生活様式や技術の発展を示しています。

りの道具

吉備系の壺、山陰系の壺、東海系のパレス・スタイル壺に加え、韓式系土器も見える



東海系のS字状口縁甕も



弧文円板、鶏形木製品や画文帯神獸鏡も見える



ここは纏向遺跡の居館域







居館域の全景(西から)

桜井市では平成20年度より、纏向遺跡の中核となる居館域を探る調査を開始し、3世紀前半～中頃にかけての居館の一部とみられる3棟の建物群を確認しています。これらの建物群の確認は軸線や方位を揃えて建てられた国内最古の事例となり、一連の調査はヤマト王権の王宮の構造を解明するものとして注目されています。



建物B (西から。奥に建物Cが一部見えています。)

西・南・北の三方を柱列によって囲まれた2間(4.8m)×3間(5.2m)、床面積約25㎡の規模を持った建物遺構です。建物Bと柱列との間は1.5～1.7mと非常に狭いものであることから、高床の建物の可能性が考えられており、東側からの出入りが行われたものと推定しています。



建物C(北東から)

この建物は南面要部東西両柱穴が後世の遺構の掘削により失われているため正確な規模は不明ですが、南北の両要部の中央からは建物に近接する形で棟持柱が検出されており、復元では2間(5.3m)×3間(約8m)、床面積約42㎡の規模を持つことが判明しています。



纏向遺跡居館域の調査

建物の西側は4世紀後半の溝によって削平を受けており、検出された建物規模は2間以上(6.2m以上)×4間(19.2m)でしたが、本来は東西も4間の規模と考えており、南北長19.2m×東西長12.4m、床面積約238㎡の規模に復元される、当時としては国内最大の建物遺構です。



建物D(南から)

南北2間(9m)以上、東西1間以上の大型建物になると考えています。建築時期は3世紀後半を含めてそれ以降ということしか解っていませんが、B～Dの3棟の建物群とは建築時期や建物方位が異なることから、未知の時期の居館が存在することが明らかとなりました。



建物E(北西から)

3世紀中頃の南北約4.3m、東西約2.2m、深さ約80cmの長楕円形の土坑です。出土遺物には多量のモモの種のほか、土器・木製品・動植物遺体などがありましたが、多くの遺物が壊された状態で出土しており、建物群の廃絶時の祭祀において道具類を破壊し、投棄したものと考えています。



大型土坑(東から)



なお、初期ヤマト政権である第二次女王国政権からヤマト政権へのプロセスについては別稿の「箸墓古墳(桜井市)」を参照してください！